

富山大学生涯学習ワークショップ 2022 報告書

これからも大きな災害は 起こり得ます！

～あなたに何が出来るか一緒に考えましょう～



2022年7月24日

富山大学地域連携推進機構 生涯学習部門

目次

1. はじめに

2. ワークショップ進行表

3. 各グループ発表

4. アンケート結果

5. おわりに

ワークショップチラシ（付録）

1. はじめに

富山大学地域連携推進機構生涯学習部門では、地域の皆さまとともに考え、語り合う場として、参加型の学びであるワークショップを開催しております。

2022年度の「富山大学生涯学習ワークショップ2022」では、「これからも大きな災害は起こり得ます！～あなたに何ができるか一緒に考えましょう～」と題し、7月24日（日）に開催いたしました。

生涯学習部門では、地域の災害に対する危機意識を高めることを目指し、以前から災害に関するワークショップの開催に取り組んで参りました。

- ① ワークショップ「災害が起きたらどうなる？」(2012)
- ② 熟議2012in 富山大学「災害が起きたらどうする？」(2012)
- ③ ワークショップ「富山でも災害は起こり得ます」(2017)

いつ起きるかわからない災害は、常に「備え」が必要です。ふだんの何気ない会話の中に災害の可能性を含んだ話題があることがとて

も大切になります。本ワークショップでは、このような日常性を意識した構成をとりました。参加者の皆さま、そして参加者の近隣の皆さまへと、防災に対する意識が広がっていくことを願ってやみません。

最後に、本ワークショップにご参加くださった皆さまに厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。

2022年9月12日

富山大学地域連携推進機構生涯学習部門



2. 富山大学生涯学習ワークショップ 2022 進行表

開会

基調講演・話題提供 13:30～14:00

「災害と防災」

(富山大学都市デザイン学部・教授 原 隆史 先生)

ワークショップ 14:00～15:30

ワーク 1

「あなたの防災に対する考えを教えてください」

ワーク 2

「家族や地域のつながりという点で、「ここが弱点になる」と思うことは何ですか？」

ワーク 3

「普段の生活の場（家庭や職場）で、防災上不安なことは何ですか？」

ワーク 4

「改めて、今私たちが備えるべきこと、行動すべきことは何だと思えますか？」

各グループ発表（3分ずつ） 15:30～16:00

原先生からの講評

閉会

3. 各グループ発表

Aグループ

【発表】

Aグループの発表をいたします。ワーク1では、まず不安なことについて出ました。そしてできることについて話し合いました。地域で助けが必要だということと、あと避難所の必要性、大事な事として正しく備えることについて考えました。

ワーク2、弱点は何かということで、準備不足。あと多かったのは絆。地域のつながりが薄くなっていて、顔と名前が一致しない。それから、なんだかんだいって富山は大丈夫なんじゃないか、という意識が弱点なのではないかとなりました。

三つ目は、防災上不安なこと。知識が足りていないということで、避難場所がどこなのか知らない人が多すぎる。あと地震と洪水で対応が違うということも知らない。家族との連絡方法も。子どもが一人にいるときに地震が起きたらどう連絡を取り合うかとか。あと、機器の取り扱い、消火器の使い方を全然練習していない。全体として、自主防災組織が機能していないという問題も出ました。

最後に、これをふまえて、備えるべきこと、行動するべきこと。コミュニケーションと意識改革が根っこにあるだろうと。意識を高めて、コミュニケーションをとり、訓練をして、計画づくりをすること。

【ワークシート】

ワーク1 考え方

<不安>

- ・大変
- ・地域でそこまでつながりがない
- ・備蓄どのくらい必要か？
- ・備えたいけどどうすれば良いか不明
- ・家族で離れている時どうやって連絡するか

<大事なこと>

- ・避難経路、避難先を住民に徹底すべきである
- ・自主防災組織は名前だけで、もう少し組織として確立すべきである
- ・正しく恐れ、正しく備える

<できるところから>

- ・無理せずできることから
- ・できることから始める

<共助>

- ・自助・共助・公助の中で共助が大切、そのための自助を実践する
- ・町内高齢者を共助することから
- ・町内居住者の隣近所との連絡の取り方

<いつとき避難場所>

- ・避難場所が学校となっているが、町内の公園や大型スーパー、公園の駐車場を一時避難場所として設定

ワーク2 弱点

<準備不足>

- ・計画性に欠けている
- ・有事の際何を持ち出すのかまとめていない
- ・家具に耐震装置を取り付けていない
- ・県・市の防災リーダー研修会に毎年町内から派遣しているが、今後も続けて欲しい

<立山神話>

- ・我が事ととらえていない事
- ・家族と避難について話していない
- ・地震が起きた場合、家族との連絡がとれるか不安である（家族と話し合いをしていない）

<きずな>

- ・地域での避難訓練をしていない？
- ・近所とのつながりが少ない

- ・身障者とのつながりが少ない
- ・知人ばかりで集まってしまう
- ・顔と名前がわからない
- ・地域コミュニティではコロナできずなが低下
- ・個人情報

ワーク 3 防災上不安なこと

= 自主防災組織が機能していない =

< 知識不足 >

- ・地震と洪水で対応どうするのか？
- ・避難場所がどこか知らない人がいること
- ・意識レベルの違い
- ・津波が発生した場合、海拔 1 m のところに住んでいるので不安
- ・周知

< 家族との連絡 >

- ・子ども（小 3）が一人の時どう合流するか？
- ・家族の安否確認

< 機器 >

- ・災害本部（町内会公民館）に設置している機器の状態確認
- ・消火器の取り扱い方

ワーク 4 備える・行動すべきこと

< 意識改革 >

- ・防災組織における「防災」の意識と必要と思われる設備の準備
- ・防災教育が必要
- ・防災とは何か？ 再教育が必要
- ・消火器の使用方法の教育
- ・興味を持つ
- ・防災の避難場所、避難ルートの徹底

< コミュニケーション >

- ・コミュニケーション
- ・地震・洪水が起きた時の行動、話し合い

<訓練>

- ・子どもに親の携帯番号を暗唱させる
- ・訓練に参加すること
- ・まず自分で（家族で）勉強・避難訓練
- ・家族との防災における連絡方法と防災器具の準備
- ・防災訓練をおこなうこと（講演会やまち歩きでも訓練だ）
- ・いつ、どこで、誰が、何を、どうした、たえず連絡できるようにしておきたい
- ・消火器チェック

<計画づくり>

- ・誰でもできる組織づくり
- ・地区防災計画を” つくる” こと



B グループ

【発表】

まず防災に対する考え方ですが、富山安全神話があって安心しきっているということで、今後は災害を意識していきたいという方がいらっしゃいました。まず命が守れるのかということがあって、自助ができるから共助もできるということ。自助のトレーニングだとか、大きな枠組みとして対策を進めていきたい。

次、ワーク2ということで、地域のつながりという点で、どの地域も問題になっているかと思いますが、地域のつきあいが全く希薄なので、防災の話をする場がないのではないかと。あとは防災に関する有用な情報を一部の人しか知らない。情報を持っていてもどう活用して良いか根本的にわからないというのが地域の弱点ではないかということになりました。それと、行政の情報が共有できていない。

ワーク3の不安なこと。家族が仕事に出てバラバラな中で、家族間の連絡がうまくいくかどうかという。それから、実際に災害になったとき、準備はしているんだけど、日頃の生活の中で対応できるのか。で、職場ですね。水深が6メートルにもなるし、そもそも職場の意識ですね。あとは身内ですね。お母さんが一人暮らししているので、避難をどうすべきか。最後は避難所ですね。開設されても、その後どう運営できるのかという。

それをふまえて。日頃から防災に対する意識が希薄なので、防災意識を高める。何十人も集まって防災の話をして意識は高まらないだろうということがあって、まずは小集団で災害のことを話し合っ、防災意識を高めるのはどうかという意見もありました。それと、多様な人がいる地域の中で、どうやって防災意識を高めるか。最後に、防災活動を普及していく際に、リーダーシップをとりやすい体制づくりが必要だという声もありました。

【ワークシート】

(1) 防災に対する考え

- ・災害に対して安心感があるので（防災グッズ、情報収集が少ない）防災意識が希薄
- ・事が起きたら大変、高齢化も進んでいる
- ・断層が近い、呉羽山近く

- ・住民構成、防災士の存在？いるのかわからない
- ・40～70代男性、女性が少ない、訓練参加者の実態
- ・訓練が形式的、訓練に対する話し合いがない、今後話し合う
- ・命が守れる、自助の知識を普及できるか？
- ・いたち川沿い
- ・1300人のコミュニティー（うち防災士6名）
- ・自助のトレーニング、要援護者に対する対策、受援意識の高揚
- ・呉羽断層の危険性、異常気象、CO₂→水蒸気などの知識の普及

（2）家族・地域のつながり

- ・地域のつき合いが希薄、どこにだれが住んでいるのかわからない
- ・話し合いの場が少なく（訓練時くらい）、話し合いの場（小学校、家族、教員も含めて）が必要
- ・例、小学生、親子、教員の参加の場があったが参加者が少なかった→場ができてだけでも大きな一歩
- ・参考、学校は月1回避難訓練実施、地域の人巻き込みも
- ・限られた人しか情報を知らない、個人情報壁（要援護者の情報）
- ・緊急連絡先の整備・共有化が必要→安全・安心ロード
- ・行政とエリアのデータの共有かできていない（要援護者・障害者）
- ・データが分かりやすく加工されていない
- ・班単位でデータの共有化（班長が把握）
- ・データをもらっても活用の仕方がわからない

（3）不安なこと

- ・土砂災害について早急に指定してほしい、現実には子弟に反対者がいる（資産下落）
- ・一人でも不安者がいれば指定すべき
- ・平日仕事行っているのに、平日時の家族の連絡がとれない（家族間の連絡に不安）
- ・日頃の生活が継続できるのか？
- ・職場のBCPがどうなっている？ 不安
- ・一人暮らしの母親の避難をどうするか？
- ・避難所運営どうなるか？（訓練したことはない）
- ・避難所の開設訓練実施（備品を並べる）
- ・無線機操作

(4) 行動すべきこと

- ・班単位（小集団）で災害の事話し合う（まずは現状把握）
- ・参加しやすい雰囲気づくり
- ・話し合いの場で意識の高揚、行動に移してもらう
- ・戸建て世帯、アパート、外国人などの多様な地域となり、同志の見守り
- ・今後町内会活動を維持するため、町内会業務の委託化の検討
- ・家族との避難場所の確認
- ・防災意識の普及
- ・情報の整理、活用
- ・リーダーシップをとりやすい体制
- ・防災士目標 21 名
- ・気象状況に対応した情報



Cグループ

【発表】

C班です。昨今、こういうマスクをして、わずかその距離にいながら、聞きづらいなと。限られた時間ですが、ゆっくり話させていただきたいと思います。5人グループで、賛否両論、あるいは多種多様な、色んな意見が出るんですが、私の主観的な発想で言うと、防災に対する考え云々というときに、いかに防災を強化していくかということだと思のですが、一般住民の方々が防災の意識を持っていただくためにどうするか。地域住民の大半がここ何十年も水が来たことがないと。そういうところで、どう避難の準備をしていくか。なかなか同調していただけない。そういう人間の心理をどう克服するかが課題だと思っているわけですね。今現在、私も地区防災を2年ほどまえに作り上げて、2800世帯、7000名がいる中で、大半はこんなところに水来るはずはない、みたいな発想なんですけど、ハザードマップも塗り替えられ、0.5しか来なかった水が、実際は0.5から3メートルは来ますよと。2階の屋根の軒先まで来ますよと。そういうハザードマップもつくられていますけど、色の濃いところに5メートルくらい来るといことがハザードマップから読みとれるんですが、問題は、一つの例としてあげますけど、そこに7000名がいて、3メートルくらいの水が来る可能性がある。標高20メートルから60メートルのところに我々は居住しています。川底が標高170メートルくらい。当然、170メートルから水があふれば、下に流れてくるわけですね。そのことをどこまで7000名の住民が理解しているか、ということを見ると、非常に乏しいところがあって、これも、根拠としてしっかり理解していただければ、防災士がああだこうだと言わなくても、どういう避難をしていこうか、というような考えになるんじゃないかな、と。原点に立ち返って、エビデンスを明確にしていくと。地震も日本全国で心配しなくてはいけないんですが、富山平野に居住する人は、常願寺川の脅威というのを、本当にどこまで理解しているか。常願寺川の上流の、地震で土砂が崩れて堆積されて、それが、晴れたある日に土砂が流れ出て、それで大洪水になったという過去があります。富山平野に全部の土砂が流れ出たら大変ですよ。2メートルくらいの、要するに1階が全部埋まるくらいの土砂が堆積していると考えたら、今のゲリラ豪雨とかですね、線状降水帯とか、一気にあのカルデラの中に降り続けたら、土砂が出る。ゲリラ豪雨とか線状降水帯とかにどこまで耐えられるのかを知っていただかないと。備えるべきは、原点を、本当に脅威として考えるように、どう説得するかが一番だと思います。

っています。

【ワークシート】

ワーク1 あなたの防災に対する考え方は？

- ・分散避難が言われている現在、町内の避難訓練をどうやるか悩んでいる
- ・町内会の避難訓練がマンネリ化しており、実際に役立つ訓練をしたい
- ・防災袋を用意する
- ・ハザードマップで避難場所を確認する
- ・ヤフー防災アプリで地震などを見る
- ・地域で防災訓練をしているの？
- ・食品を用意する（カンパン、水など）
- ・女性集合！
- ・夏休みの宿題にして！ 家族で話しましょう
- ・年齢をこえてスマホに期待、高齢者こそ
- ・楽しい「実践」「サバイバル体験」してなんぼ
- ・災害からは逃れられないが被害を小さくしたい
- ・防災の取り組みはライフワーク
- ・人と関わり合うことで防災知識が広まる、深まる
- ・町内から死者を出さないための取り組み
- ・知識を身につけて家族を守りたい

ワーク2 「ここが弱点になる」ということ

- ・方言がわからない、コミュニケーション不足へ方言講座を
- ・非密集地、顔、名前、声知らず、話さない状態
- ・サークル活動が不活発
- ・家族の住んでいるところがバラバラなので災害時にどうなるかわからない
- ・町内会と地域とのつながり
- ・祭などで地域の活動はあるがその他はつながりがないと思う（コロナで中止）
- ・新しい住宅やマンションができて、どんな人がいるのかわからない
- ・町内の～さんと、名前と顔がでない
- ・高齢化で一人で避難できない人が増える
- ・独居高齢者、引きこもり対策

- ・町内（地域）にかかわりたくない人が増えてきた
- ・核家族化で伝承されない、今が良ければの風潮
- ・防災従事者の高齢化
- ・地域の様々な組織が防災の分野だけバラバラ
- ・防災対策の理解と浸透（100%でない）

ワーク 3 家庭や職場で防災上不安なことは何？

- ・地震対策について何度も講習会をやったが・・・
- ・避難行動、要支援者を助ける事ができるか？
- ・一時避難所への誘導が訓練通りにできるか
- ・自主防災会隊長として緊急対応できるか？
- ・防災士を取りましたが会社の上司から仕事に関わるの？と言われた。職場内で避難訓練をしていない
- ・交通安全ミーティングを毎月一回しているところで、防災についても話したい
- ・ガスなどの災害訓練をしているが他がない！
- ・交通安全教室は4回あるが防災教室は0回！
- ・災害時、地域内情報伝達ができない不安
- ・災害時、今何をすべきか判断できない不安

ワーク 4 私たちが備えるべきこと、行動すべきこと

- ・意識の必要性
- ・序説支援など日頃からのコミュニケーションあるのみ
- ・積極的交流のために
- ・災害発生の可能性？
- ・我が家の「不安」を話し合う！！
- ・最も可能性の高い災害は何かを認識する事が災害の第一歩
- ・納得できる根拠は？
- ・BCP（ビジネス）→LCP（ライフ）
- ・災害となる根拠を知る
- ・地区防災計画に基づく避難所の備蓄品性日
- ・災害時の安否確認にITの導入
- ・地域、職場で防災訓練をおこなう、楽しく（アイス、ジュースあたる）
- ・ビンゴゲームのように当たると楽しいしくみがあるといい。

- ・子どもたちが楽しんで学んでほしい（中高生）
- ・ITを使用して情報発信（テレビ・スマホなど）
- ・一人一サークル入会→特典を出す（金一封）
- ・1日レッスン、スマホでLINE 今日から友達
- ・災害弱者（情報・避難）対策（ネットが使えない、歩けない・・・）
- ・災害がおこりそうな所には住まない（堤防近く、斜面の下）
- ・非常持ち出し袋



Dグループ

【発表】

Dグループ発表させていただきます。私たちは4人のグループで、色々な意見が出ました。

まずワーク1のところですが、防災に対する考え方というところで、命を守ることを第一にする、という意見が出ました。あと、県外に出たりした方の意見としては、富山は地震の回数も少ない、他は地震がたくさんあるので、富山は少し防災に対する意識が薄いと感じられると。それから、町内、自分の住んでいる地域のコミュニケーションも大事なので、それに参加して、つきあいをしていく。そういった意見がありました。

ワーク2では、家族間の会話が大切と書いてありますが、会話が少ないと、そこが弱点になるということになります。それから、近所のつきあい、コミュニケーションの不足がみられるので、不足にならないようにとの意見がでました。あと、地域で避難訓練やられているということで、それ自体は素晴らしいけど、参加してみたけど、少し真剣さに欠けるところがあるという意見があります。あと、家族で住んでいる場所が異なることがあるので、そういうことも弱点になるのでは、ということになります。

ワーク3で、職場とか家族で不安になること。家族と職場で分けて議論しました。家族では、高齢の方がいらっしゃると、家族の避難が不安だと。あと常備薬、薬が切れたりとかするかも知れない。で、先ほどの話にもありましたが、離れて住んでいる家族の心配がある。あと職場も家族も含めてですが、避難所でのトイレとかが不安だと。職場の方に行きますと、職場と家が離れているので、帰れるかという不安がある。それから何かあったときの帰宅判断が難しい。仕事も大事なので、どっちをとるかということではなくて、どっちも大切なんだけど、という不安。町内会で全員の名簿を作っていたらという方がいました。そのメンテナンスは大変なんですけど、どういった方がどこに住んでいるのかがわかる。とても素晴らしいと思いました。

最後、ワーク4の方で、避難ルートを複数決めておくこと。コミュニケーションを大切にすることですね。近所のあいさつとか。で、キャンプ用品とかをお持ちになって、非常時だけでなく、平常時にも使えるものも持つておくということも大切だと。最後ですが、感謝して今を大切に生きること、という意見も出ました。

【ワークシート】

ワーク 1 あなたの防災に対する考えを教えてください

- ・命を守る（第一に）
- ・防災を考え、今をより豊かに
- ・東京は月1回は震度3くらいの地震がある（体感は頻繁）防災の設備とかは岡根をかけている（行政）
- ・高齢者など、要配慮、何かしたい
- ・町内の集まりに参加、近所のつきあい！！

ワーク 2

- ・家族間の会話が大切
- ・近所づきあい（町内会でのつながり）、コミュニケーションの不足にならないように！！
- ・避難訓練を真剣に（真剣にやらないと意味なし）
- ・家族の住んでいる場所が異なる

ワーク 3

<家庭>

- ・家族の避難（薬／高齢）
- ・別居家族の心配
- ・トイレ

<職場>

- ・職場と家の移動は可能か（家に帰れるか不安）
- ・帰宅判断（災害時）
- ・会社と家族どちらが大事
- ・トイレ

<地域>

- ・町内会全員の名簿をつくる→メンテナンスが大変
- ・食料・備蓄を回す、保存するだけでなく、新しく買った古い食料を使う

ワーク 4

- ・避難ルートを決めておく（複数）
- ・柔軟、寛容な行動を心がける（避難場所など）
- ・顔、コミュニケーション
- ・隣近所の何気ない声かけ、あいさつ
- ・非常時にも平常時にも使えるもの、キャンプ用品、非常時だけしか使えないとなかなか購入できない・・・
- ・感謝して今を大切に生きる
- ・安否確認



E グループ

【発表】

Eグループということで話し合いをさせていただきました。ワーク1の防災に対する考え方。ワーク2のここが弱点。ワーク3は防災の不安なこと。ワーク4は備えるべきことは何かということ。それぞれ様々な意見が出たんですけど、一番根本にあるのか、先ほどから皆さんおっしゃっているようにコミュニケーション。これがすべてだと思います。これについてお話しさせていただきたいと思います。コミュニケーションについては、先ほどから各班が発表されている通り、この言葉が出ておりました。私どもの方では、ワーク1から、はじめから、コミュニケーションが不足しているよね、ということで話がありまして、それは、家庭の中でもそうだし、近所もそうだし、もちろん地域の方々にいたってはコミュニケーションが不足していることは皆さんご承知のことだと思います。ワーク2の方では、弱点ということでコミュニケーションの不足があがりました。3番に関しては、ワーク3の方では、不安なこと、ということで、情報が入らない。先ほど先生のお話の中でスマホをもっておられない方手をあげてください、とお話されたときに、数人の方が手をあげられました。その方がおっしゃるには、情報が入ってこない。情報格差ということがある。ここの中ではスマホを持っておられる方がたくさんおられますが、やはり情報が入ってこない。となりにおばちゃんが一人で住んでおられるんですけど、私が声をかけなかったら情報は伝わらない。こういう方がたくさんおられることも事実だと思います。最後に、ワーク4では、何ができるかということで、備える、知識、私たちが、人それぞれが知識を備える。それから備蓄が必要だという話も出ておりました。行動としては、自助・共助の意識を高めるために様々なチャンネルを使って防災情報を伝える。最終的にはコミュニケーションが大事である、ということに行き着きました。

【ワークシート】

ワーク1

- ・色々な角度で情報を伝える
- ・災害シリーズで伝え続ける
- ・バイアス、都合のよいように考える

- ・災害心理
- ・伝え続けるしかない
- ・住んでいる場所でそれぞれ災害がある
- ・九州の火山噴火の火山灰が富山にも積もっている、富士火山灰が東京に
- ・自然は危険をあわせもつ、認識を持つべき
- ・鹿児島ではビニール袋が配置されていて住民が火山灰を集めている、富山でも防災を
- ・自主防災組織
- ・徘徊する人、地域でどんな認識と作って対応するか、連絡図作成
- ・防災認識があっても動かない

ワーク 2

- ・家庭内でもコミュニケーションが不足
- ・子どもを含め、いかに人を取り込むか
- ・学校の教育は、先生の義務でやっているだけ
- ・コミュニケーションをとる
- ・中学生が参加してこない、教育とつながっていない
- ・世話をする人がいない、やりたがらない
- ・地域の行事に参加して、コミュニケーションをとるきっかけを保つ
- ・地域と学校の訓練がつながっていない

ワーク 3

- ・スマホも絶対とはいえない
- ・市町村によって情報手段が異なる
- ・情報弱者
- ・個人間の連絡
- ・災害時の対応をあらかじめ決めておく
- ・からぶりを恐れない
- ・最後はコミュニケーション

ワーク 4

- ・行動・自助・共助の意識を高めるためにさまざまなチャンネルを使い防災情報を伝える

- ・コミュニケーション
- ・家族・地域、備える
- ・身を守る
- ・知識
- ・備蓄資材



F グループ

【発表】

私どもでは、いろいろ課題が出てきて、結論から先に言いますと、地域の方々の防災意識が少ないと。それに対してどうすればいいのか、ということになりました。まず、あなたの防災に対する考え方を教えて下さい、ということで、まず家族、企業という点で整理しました。主なものとしては、自分の命が助かる、家族の命が助かる、これが大事だなと。また、防災は企業経営にとっても必要です。トータルすると、家族が大事であり、人命が最優先だと。ワーク2ですが、弱点はどこですか、ということで、これは家族と地域という点で整理しました。主なものとしては、家族で避難行動について話していない、あるいは家族で防災の対話が少ないということがあります。地域の弱点としては、町内会で防災組織がない、あるいは町内で情報伝達が少ない、防災に対する意識が少ない。これらが弱点だということになります。次のワーク3ですが、ふだんの生活で防災上不安なことはなんですか、と。家、まち、職場という点で整理しました。一番には、災害の経験がないと。富山は災害が少ないというのは事実なので、実体験がないものだから、わからない。町内、職場でもやってないですね、という不安。最後ですが、あらためて、私たちが備えるべきことはなんですか、と。まず家族で話し合いを持つことだと。話し合いましょう、ということですね。まちでは、防災行動をとること。防災士がいろんなところで啓蒙活動をしていくことが大事だなと思います。職場ではですね、社長も含めて取り組むこと。

【ワークシート】

ワーク 1

<町>

- ・災害は忘れた頃にやってくるのではなく、必ずやってくる
- ・災害が発生してもすぐには消防団は来てくれない
- ・町内会での自主防災組織をつくること
- ・防火・防災への訓練を数多くおこなうこと
- ・訓練を通じて情報を伝える
- ・町民の安全を確保すること

- ・待ちの要配慮者の安全を確保すること
- ・町民の財産を守ること
- ・町の災害を広げないこと

<自分・家族>

- ・自分の命が助かること
- ・家族の命が助かること
- ・自分・家族にケガがないこと
- ・家の財産を守ること
- ・家族が別の場所にいた場合に、集合場所は決めておくこと
- ・災害発生後、避難する際、持ち出すものをリュックにつめておく
- ・ベッドの下にリュックを置いておく、特に外履き

<企業>

- ・企業の平常継続に必要です（BCP）
- ・防災は企業経営者の理解が必要です
- ・防災は”公助”ではなく”協働”だと理解しています
- ・防災にはサイバーセキュリティを含みます

ワーク 2

<家族>

- ・家族と日常的に災害時の行動を話し合えているか
- ・家族で防災の話が少ない
- ・家族の弱点、ケータイ（スマホ）が繋がらなかつたときの不安
- ・災害発生時家族の連絡がとれるかどうか（職場・家）

<地域>

- ・災害に対する意識が薄い、約1割程度
- ・地域行事の参加が少ない
- ・防災組織が1年交代（継続しない）
- ・自主防災隊員のやらされ感（本気になっていない）
- ・自主防災組織の必要性が理解されていない
- ・隣近所のつきあいがいい
- ・町内会で防災組織のない町では情報伝達ができない
- ・町内会で自主防災組織ができて参加しない人をどうするか

- ・地域の弱点、高齢者、障害者の個人情報秘匿と救済の必要性
- ・公的立場の人は当然私的（自分の）家族が優先することになるのでは
- ・職場で災害発生時帰宅できるかどうか（雪で帰れなかった）

ワーク 3

<家>

- ・実体験がない
- ・家の耐震診断で倒壊との評価
- ・切実感が薄れる、持続させること
- ・現状の備蓄品で十分なのか？
- ・備蓄がなされていない
- ・白内障の犬がいると避難するのが大変
- ・身体の都合が悪い家族がいると行動が制限される
- ・連絡のとりかた
- ・避難のしかた、家族と確認
- ・連絡のとりかたが決まっていない

<町内>

- ・同じ班に 80～90 歳の人達が大勢いる
- ・町内の自主防災組織が機能するとは思えない
- ・町内のブロック塀など
- ・町内の要配慮者など一人暮らしの老人の補助
- ・町内ご近所の状況がよくわからない（コミュニケーション不足）
- ・防災用品、準備品（食料、簡易トイレなど）が足りないのではないか
- ・町内の不安、要支援者の把握が不十分
- ・要支援の自主申告がなされているか、もれているのではないか
- ・老人のみの家が多い
- ・切実感が乏しい

<職場>

- ・職場のBCPが機能するか
- ・職場の安否確認のシステムが機能するか
- ・職員の家族の安否
- ・防災用品がほとんどない
- ・緊急連絡網が機能するか心配

- ・帰宅困難になる可能性がある

ワーク 4

<全体>

- ・安心安全な” 富山” に住んでいるので災害に対する意識が薄いようなので実際の災害地へボランティア行動する
- ・防災用品のチェック
- ・連絡網の確認と訓練
- ・訓練の実施と毎年継続

<家>

- ・家族での話し合い？ どうやるのか？
- ・家族に防災意識の向上を話す
- ・家では備えているつもり

<町>

- ・町の意識向上どうやるのか
- ・要配慮者の配慮（個人情報）
- ・町内における A E D の配置場所の把握
- ・避難経路の周知徹底
- ・自主防災組織をつくること
- ・地域の防災訓練に参加し情報を収集して自分を守るようにしたい
- ・地域の防災力向上にむけて行動しています、FM番組「防災に備えて」

<職場>

- ・防災方法を整理して情報提供しています
- ・企業の事業継続力強化を支援していきます（BCP）セミナー、研修など
- ・防災として特に重要な情報セキュリティの意識を高めていく必要があります

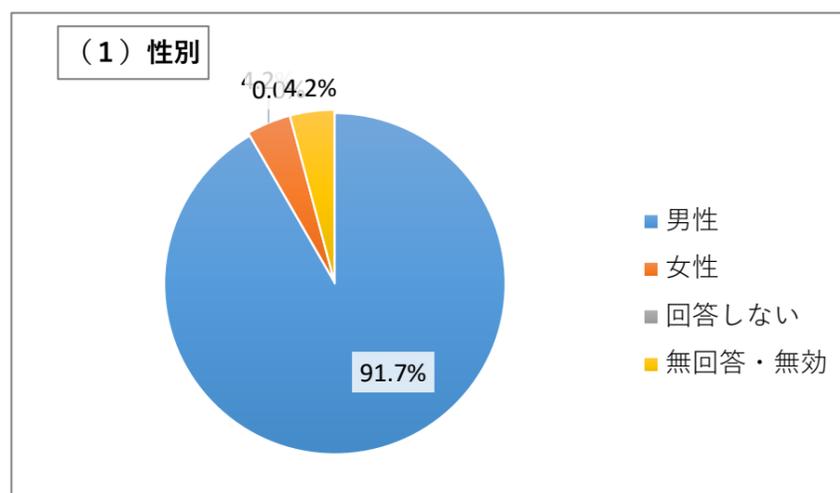


アンケート回収数 24

(1) 年齢と性別についておたずねします。

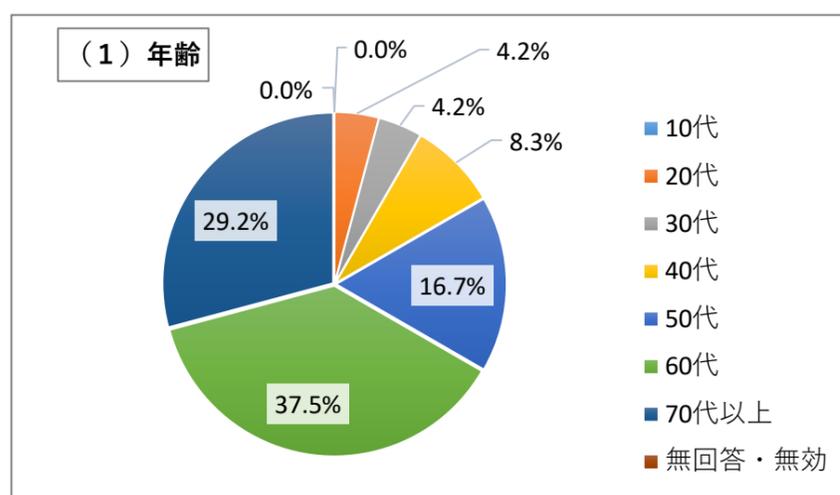
性別	男性	22	91.7%
	女性	1	4.2%
	回答しない	0	0.0%
	無回答・無効	1	4.2%

(24)



年齢	10代	0	0.0%
	20代	1	4.2%
	30代	1	4.2%
	40代	2	8.3%
	50代	4	16.7%
	60代	9	37.5%
	70代以上	7	29.2%
	無回答・無効	0	0.0%

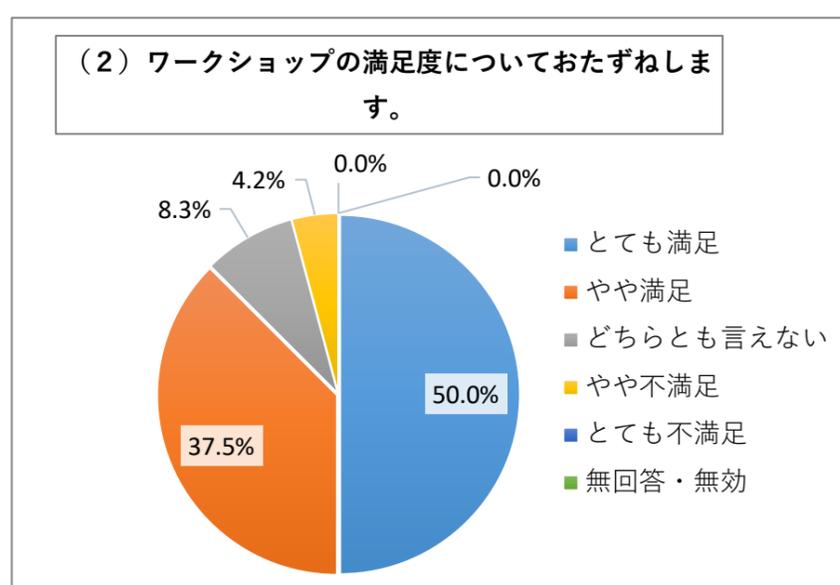
(24)



(2) ワークショップの満足度についておたずねします。あてはまる番号に○をつけてください。

とても満足	12	50.0%
やや満足	9	37.5%
どちらとも言えない	2	8.3%
やや不満足	1	4.2%
とても不満足	0	0.0%
無回答・無効	0	0.0%

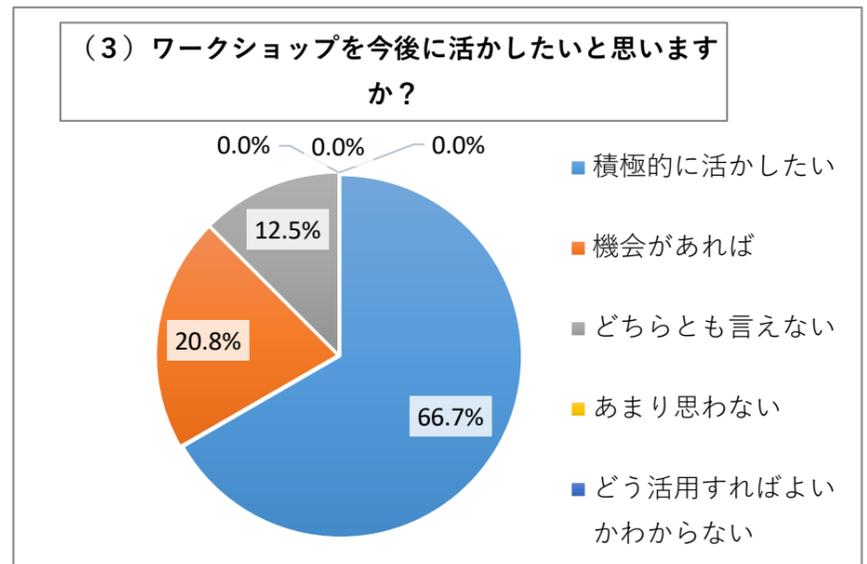
(24)



(3) ワークショップを今後に活かしたいと思いますか？あてはまる番号に○をつけてください。

積極的に活かしたい	16	66.7%
機会があれば	5	20.8%
どちらとも言えない	3	12.5%
あまり思わない	0	0.0%
どう活用すればよいかわからない	0	0.0%
無回答・無効	0	0.0%

(24)

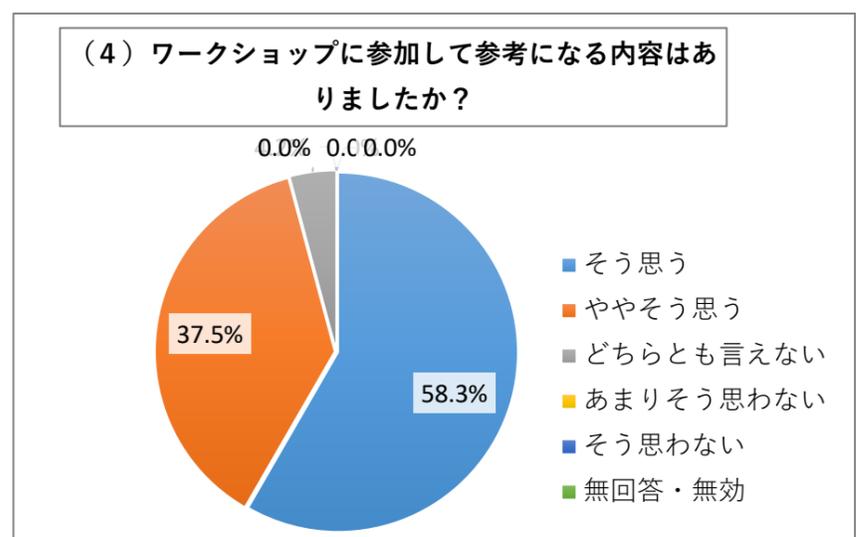


(4) ワークショップに参加して参考になる内容がありましたか？あてはまる番号に○をつけてください。

そう思う	14	58.3%
ややそう思う	9	37.5%
どちらとも言えない	1	4.2%
あまりそう思わない	0	0.0%
そう思わない	0	0.0%
無回答・無効	0	0.0%

その理由(自由記述: ※別途記述あり)

(24)

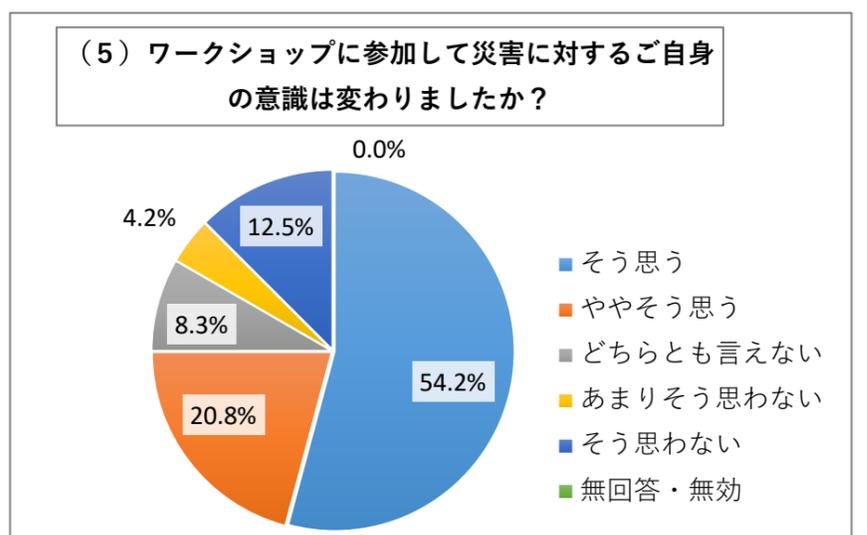


(5) ワークショップに参加して災害に対するご自身の意識は変わりましたか？あてはまる番号に○をつけてください。

そう思う	13	54.2%
ややそう思う	5	20.8%
どちらとも言えない	2	8.3%
あまりそう思わない	1	4.2%
そう思わない	3	12.5%
無回答・無効	0	0.0%

その理由(自由記述: ※別途記述あり)

(24)



(6)ワークショップに参加したことでどんなことに気づきましたか。(自由記述)

避難訓練地区でやっていない。
楽しみながら活動する事が継続させるコツであるということ。
全てにおいて、コミュニケーション(家族、近所、情報ツール)の良し悪しが防災活動に反映されることに気づいた。
防災という言葉で各人がイメージすることが全く異なること。これは非常に良かった。
いろんな問題があり、防災について考えていきたいと思いました。
多種多様な思い、考え等々ある。
次回も参加したい。
防災意識を高める行動をとらなければならないと思いました。
「防災上、やるべきことが沢山ある」と思った。コミュニケーションが大事だと思った。情報弱者に対してはどうすべきか考える必要がある。
色々な参加者と意見交換をすることで自分のスキルアップにつながったと思います。
安否確認の方法を、町内会独自に作成(情報を集めている)しているところありなるほど
悩みの共有という部分で皆、よく似たことに悩んでいたり着目しているなど感じた。
防災意識の高い方が多く色々な意見が聞け、勉強になりました。
「危機意識の無い人をどう変えるか」と考えている人が多いと思いました。
防災士の方の意識と一般人の認識のズレがあり、防災意識を高めるよう努めたい。
やり方が難しい
女性の参加が少ないこと、なぜ？面白そうじゃない？私に関係ない？ただただ忙しい？でも家族のことなのに…。
出問が抽象的だったので色々な観点からの提案があり良かった。
各地での取り組み事例
コミュニケーションが大切
色々な意見を聞いてよかった。コミュニケーションがとれてよかった。

(7)ワークショップの中で伝えきれなかった活動や考えがありましたら、ご自由にお書き下さい。

地震発生時のトイレの大切さ
安否確認の重要性
実災害の経験がない。町内では防災だよりを発行しているが無反応。
高校の受験で防災上の課題等について、問題を出したらどうかと思う。
日頃の準備としてマイタイムライン作成や避難ルートの検討も必要と思っています。
子供を含め親世代をどう巻き込むか。
地域のつながりは、すべてコミュニケーション不足により薄らいでいる。個人情報保護で隣の人も何人なのか知らない町内である。ムラ社会を絶対良いとは言わないが、発言から人を守る程度の情報、家族への連絡先など備えておくべきと思う。
救命・救助(共助)について
話し合いは有意義でした。
高齢者一人暮らしの方々の避難経路リスト各人に作成
ベースはコミュニケーション!! 自ら考えて、初めて自分事だろう。皆で考えれば解決。そのために…1人1つのサークル参加。

(8)ワークショップを受けて、今後どのようなことをやってみたいと思いましたか。(自由記述)

避難経路をみんなで歩く
防災講座では原点に立ち返り、自助や共助の方法を伝えていきたい。
防災士として地域の方々への広報活動、訓練
町内会でもやってみようと思っている。
防災意識を高めることができた。
今後も機会があれば参加したい。
災害が起きるということをリアルに伝えるための手法として身近な地域の映像で例示できたらいいなと思いました。
会社や地域の皆様に、このような活動をしていきたいと思いました。
言い続ける事
町内会で提起したい。安心安全カードを身につけましょう。
大地の自然災害が起こるメカニズムについて知りたい。
職場で防災について話したい。
まずはだれでもスマホLINEでのやり取りを一日で可能にするノウハウの習得。3人に伝授、その各1人が別の3人に教示→計12人がLINEグループでやりとり。たまには防災テーマに会話も。あとは”大雨”を待つだけ(笑)
地域に影響力を発揮したい。
町内会で提起したい”安心安全カードを身につけましょう”。備えることの大切さを伝える。共助できるよう、体制づくりを整える。
自主防災会はあるが形だけのため、災害に対し起こる事をもっと真剣に考える。
訓練の重要性を実感した。

(9)その他、ご意見・ご感想などありましたら、ご自由にお書き下さい。(自由記述)

このようなワークショップの手法を防災講座の方法として生かしていきたい。
ホールでの講演会があるといいです。
今後も続けてほしい。
楽しく防災、日常生活にどう防災を取り組むか。
ワークショップの課題が多すぎるように感じた。
DIG、HUGなどの訓練、地域防災計画作成のための検討会、等のワークショップがあればいいと思いました。
都市デザイン…の部分でのお話をもっと聞きたかった。
小学生の夏休みの「宿題」に防災的なものを含む。それに親が加わり、さらに祖父・祖母が加わる、近所も無理やりからめる…なんてうまくいくかどうか。
Cチームの意見を聞きたかった。

原先生からの講評

今日はみなさんご苦労さまでした。

みなさんのグループを回りながら、私も色々と勉強させていただきました。

この中で大きく二つの課題に悩まれているように見受けられました。ひとつはコミュニケーション、もうひとつは防災意識をいかに高めるかということだったように思います。これらについて私が思うには、防災意識を高めるというよりは確かめるという観点で、コミュニケーションはそのために必要なスキルなのではないでしょうか。すなわち、防災についてみんなで考える際、コミュニケーションが上手くとれていれば、おのずと防災に対する意識が高まっていきます。逆にコミュニケーションが上手くとれていなければ、人がなかなか集まらなかったり、集まってくれた人たちの中でも積極的な意見が出なかったりします。これでは防災意識を高める以前に、みんなの防災について考える上で大きな障害になるような気がします。

今度機会があったら、自主防災会議を楽しい会議にできないかということも考えてみませんか。以前に今回のようなワークショップをやっているときに、どうやったらみんなが参加してくれるだろうということについて、色々な意見が出ました。その中のひとつに、例えば料理の専門家に、備蓄品でできる美味しい料理のレシピを防災会議で教えながら、みんなで作ってみんなで食べるというものがありました。備蓄品は年月が経てば賞味期限が切れてしまうわけですから、「賞味期限ひと月前の食材を使ったおいしい料理を教えますよ」なんて言ったら、もしかしたら多くの人が集まって楽しくなるかもしれませんよね。「防災会議に参加したら防災グッズを差し上げます」というよりも楽しそうではないでしょうか。みなさんの話を聞いていてそう思いました。

でも、難しいこともやっぱり事実で、みなさんの話を聞いていて、非常に大きな課題があることはわかりました。ただ、命を諦めるわけにはいかないですよ。何とかみんなで頑張って、もっともっと知恵を出していきたいと思えます。これからも機会があれば、どこの組織でも呼んでもらえば、スケジュールさえ合えば私も参加させていただきますし、何かのお力になればとも思えます。

今日はみなさん本当にご苦労さまでした。ありがとうございました。

5. おわりに

原先生からの基調講演をふまえ、各グループでおこなわれたワークでは、いくつかのポイントが明確になりました。

まず第一に、個人化社会の到来、コミュニケーション不足など、全般にコミュニティの関係性が希薄化している現状があること。このような状況のもとでは、災害発生時にどう対応してよいかわからず、混乱してしまうことが予想されます。家族や地域の絆を今よりもいっそう深めていき、いざというときにしなやかな対応ができるよう備える必要があります。

第二に、避難に際して配慮が必要な方々についての情報を共有し、災害発生時に救助にあたる体制をどう構築するか、という課題が示されました。「どこに誰が住んでいるのかわからない」という近年の現状をふまえ、地域組織の情報収集をどう進めたらよいか、という論点が浮かび上がってきました。

第三に、地域で開催される避難訓練に多くの方々に参加してもらうにはどうしたらよいか、また、訓練に真剣に取り組んでももらうにはどうしたらよいか、という課題も提出されました。このことは、災害発生時の備えとして重要なポイントとなるものです。

ワークでは活発な議論が展開されましたが、中でも印象的な発言が記録されています。「災害は忘れた頃にやってくるのではなく、必ずやってくる」。本ワークショップの一カ月前、能登半島で幾度かの地震が観測されました。ワークショップ終了直後には、北陸地方で深刻な水害も発生しました。災害は身近なものであり、十分な備えによって適切な対応が可能になります。富山の「安全神話」を乗り越え、災害に対する意識の高揚、十分な備蓄・訓練など、いつでも皆が助け合えるような体制づくりが求められています。そして、本学の原隆史教授が指摘しているように、防災の諸々の備えには、参加者に「楽しさ」の要素をもたせるなど、工夫の余地がふんだんにあることが示唆されました。本ワークショップが、少しでもその動きにつながれば、ということをお願いばかりです。

最後になりましたが、本ワークショップは富山県防災士会のご協力をいただきました。ここに記して心からの感謝を申し上げます。

2022年9月12日

富山大学地域連携推進機構 生涯学習部門

これから大きな災害は 起こり得ます!

参加費無料

～あなたに何ができるか一緒に考えましょう～

3・11から10年を超え、その災害の傷跡は未だ多く残り、苦しんでいる人も未だ沢山います。それにもかかわらず、近年のコロナの影響もあってか、その記憶が薄れつつあるという話を聞くことがあります。私たちにとって3・11の大きな教訓は「大きな災害が起こり得ることを忘れてはならない」ということだと思います。

そこで今回のワークショップでは、私たちの防災についての意識を改めて検討してみたいと思います。その上で、「自分や家族が災害被害をまぬがれるためには何が必要か」をみんなで考えてみませんか。きっと今後役に立つ新たな発見があるはずです。



日時 ● 2022年 **7月24日(日)** 13:30～16:00

定員30名
(事前申込制、先着順)

場所 ● 富山大学五福キャンパス 黒田講堂会議室

基調講演 (話題提供)

「災害と防災」

富山大学都市デザイン学部 教授 原 隆史 先生

協議のポイント

- あなたの防災に対する考えを教えてください。
- 家族や地域とのつながりという点で、「ここが弱点になる」と思うことは何ですか？
- 普段の生活の場（家庭や職場）で、防災上不安なことは何ですか？
- 改めて、今私たちが備えるべきこと、行動すべきことは何だと思いますか？

各グループの発表・講評

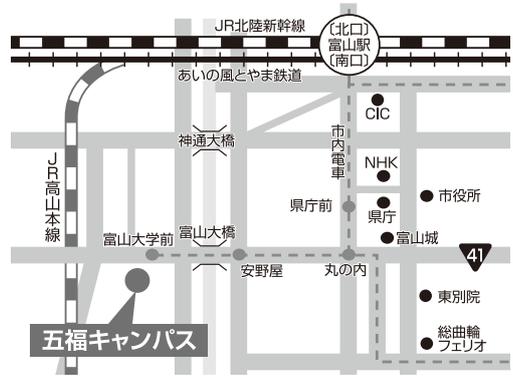
ワークショップ参加申込書

お名前	フリガナ	電話番号	
		メールアドレス	
ご住所	〒 ー		

交通案内 JR富山駅から

- 市内電車「富山大学前」行き「富山大学前」下車 約15分
- バス「新高岡駅」「小杉駅前」「富大附属病院循環」行きなど「富山大学前」下車 約10分

※公共交通機関を利用くださるようお願いいたします。



新型コロナウイルス感染防止対策

- (1)マスクの着用をお願いします。
- (2)設置されているアルコール消毒液で手指消毒を行って下さい。
- (3)発熱等風邪の症状がみられるときは、参加を控えて下さい。
- (4)受付時に非接触型体温計にて検温します。37.5度以上の方は、参加できません。
- (5)受付の際には、ソーシャルディスタンスを確保のうえお並び下さい。
- (6)ソーシャルディスタンス確保のため、座席は十分離しております。また、換気のため、窓等を開けますので、ご協力願います。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、本ワークショップを中止する場合があります。

ワークショップの申込方法

以下の3つの中から1つを選んでお申し込み下さい。 **申込期限: 2022年7月14日(木)**

- (1)申し込みフォームに必要な情報をご記入の上、送信して下さい。

以下のサイトにアクセスし、必要な情報を入力して送信して下さい。

<https://forms.gle/tSnmHE5bNeGUCjDj6>



- (2)チラシ表面下側の申込書に必要な情報をご記入の上、提出(または郵送)して下さい。

(提出・郵送先)

〒930-8555 富山県富山市五福3190 富山大学地域連携推進機構生涯学習部門

- (3)以下のメールアドレスに氏名(フリガナ)、住所、電話番号、メールアドレスをご記入の上、送信して下さい。メールのタイトルは「ワークショップ参加申込」として下さい。

(富山大学地域連携推進機構生涯学習部門共通アドレス) lifelong@ctg.u-toyama.ac.jp

お問合せ ● 富山大学 地域連携推進機構 生涯学習部門

〒930-8555 富山県富山市五福3190 TEL:076-445-6956 E-mail:lifelong@ctg.u-toyama.ac.jp